



沖縄県県民投票に思いをはせて

高橋 司

たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法
学研究科修了。「高橋・日浦法律事務所」代表。

平成31年2月24日に沖縄県で実施された「建設のための埋め立てに對する賛否を問う」県民投票の報道を見て、あらためて恩師の言葉を思い出した。大学に入學して早々、講義中に故・家永三郎教授に当てられたことがあった。その際のやり取りについては、この「ラムにも書き綴ったことがあるが、私は、突如、家永教授から、「そこのピンク色のトレーナーを着ている君!」「人権」とは何ですか?」と聞かれた。私は、取つて付けたように「人が生まれながらに持っている権利です」などと答えたが、「もう少し自分の言葉で考えてみてください」と言われ、どれも同じようないくつかの答えを出したものの、どれも違うと言われた後、「人権とは、イマジネーションなんです」と教えてくださった。そして、「人権といふものを考へるということは人のことを考へ続けるということ、いま生きている時代から過去に起きた出来事(歴史)に対してもう関わっていけるのか、また、将来に対してもうついてくるのかを考え続けることなのです。君たちの中には法律家を目指す学生もいるだろうけれども、

水が土に染み込んでいくかのようになにか心の中に解けていった。

日々、私が人のことを考へていくことが、すなわち、私のイマジネーションが試されることにつながつていくのであれば、いつも足りないことしかできない、足りないことしかできていない自分の姿を思ひ知らなければならぬと思った。どれほど時間を使やし、気持ちを込めて、所詮、自分の拙いイマジネーションから出でくる答えにしか過ぎないのであるから、十分なことなどできないと思つた。

話を県民投票に戻そう。沖縄県の当日の有権者総数は約115万人ほどであったが、投票率は約52%

(人数でいうと約60万人)で、おおよそ43万人が反対票を投じた。有権者数全体のおよそ37%の人々が埋め立て工事に反対という明確な意思表示をしたのである。

私たちは、このまっただ中に呼吸をして生きている。過去の出来事でも将来の出来事でもないが、薩摩藩

人権というものをそういうものとしで考へてくれると嬉しい」と話してくださった。この家永教授の言葉は、私が心の中に解けていた。

日々、私が人のことを考へていく

ということは、極めて小さくことなのかもしれない。すでに何年にもわたる日米の協議を経て普天間に基地の移設問題、その代替地の検討がなされ、従前の沖縄県知事による埋め立て承認という事実も看過できない。積み重ねられた既成事實を直視すると、「いろいろ考へてみたけれども、最終的には結論に変更はありません」などと日々さまざまな場所で語られる言葉と同じ言葉しか出てこない結果になるのかもしれない。

数年前、友達に教えて貰つてキヤンプ・シユワブの近くを訪れたことがあつたが、あの日の前に広がる青々とした海と埋め立てされている状況を見ることから始めてもいい。言葉にならなくとも、そこで生じている音、流れしていく空氣などをわずかな時間であつても感じ取ることができるのであれば、私たちは、辺野古新基地建設という問題を始めとして、歴史を学ぶことに重きを置かれなくなつた。繰り返し述べてきたが、日本人の価値判断が単色化し、その色合いを凝視せずにシロかクロかを決めてしまい、その後の思考を停止する。数多くの人が工事予定地にて座り込みを続ける報道に対しても

の支配や明治維新後の琉球処分、そして、戦中戦後の沖縄がたどつた歴史を踏まえ、何ができるのである。

私たちができることは極めて小さくことなのかもしれない。すでに何年にもわたる日米の協議を経て普天間に基地の移設問題、その代替地の検討がなされ、従前の沖縄県知事による埋め立て承認という事実も看過できない。積み重ねられた既成事實を直視すると、「いろいろ考へてみたけれども、最終的には結論に変更はありません」などと日々さまざま

な場所で語られる言葉と同じ言葉しか出てこない結果になるのかもしれない。

数年前、友達に教えて貰つてキヤンプ・シユワブの近くを訪れたことがあつたが、あの日の前に広がる青々とした海と埋め立てされている状況を見ることから始めてもいい。言葉にならなくとも、そこで生じている音、流れしていく空氣などをわずかな時間であつても感じ取ることができるのであれば、私たちは、辺野古新基地建設という問題を始めとして、自分が住んでいない場所で起きている事柄について前進して考へ始め、それを我が国のこれまでの歴史との関連で位置づけ、本当の意味での民主主義、住民自治、地域の自己決定権というものを言葉にできるのではなかと思う。

私たちは日々いろいろなことを考へ、また、考へるのを止めている。そして、考へたことであつても自らの言葉で表現することは難しいし、当たり前のことしか言えないのかもしれない。けれども、沖縄に行ってみて名護市周辺を歩いてみると、それでもいいのかもしれない。

数年前、友達に教えて貰つてキヤンプ・シユワブの近くを訪れたことがあつたが、あの日の前に広がる青々とした海と埋め立てされている状況を見ることから始めてもいい。言葉にならなくとも、そこで生じている音、流れっていく空氣などをわずかな時間であつても感じ取ることができるのであれば、私たちは、辺野古新基地建設という問題を始めとして、自分が住んでいない場所で起きている事柄について前進して考へ始め、それを我が国のこれまでの歴史との関連で位置づけ、本当の意味での民主主義、住民自治、地域の自己決定権というものを言葉にできるのではなかと思う。